

実践報告「英語嫌い」に英語の勉強をさせる方法（その5）

堀 内 ちとせ

1. はじめに

英語が専門ではなく、それほど得意でない学生も存在しているクラスで、せめて英語の授業時間だけでも、真剣に英語学習に取り組めるよう、藤田保健衛生大学、衛生学部、衛生技術学科1年の上級クラス（習熟度別）45名（2006年度前期）の「読解の授業」を対象に検討する。

2. 方法

以下の要領で授業を進め、③～⑥を毎週、最後4回の授業では③～⑦を繰り返す。

- ①専門が「医療関係」であるため、できるだけ学生の興味を引きそうな、「健康科学系の教科書」を使用する。また、長めの文章ばかりが載っているものを避け、比較的「短めの文章」がいくつか載っているタイプのものを選ぶ。
- ②授業の第1回目に、学生自身が読みたいと思う文章を教科書から3つ選ばせ、その「学生の希望」の集計に基づき、希望者が多かったユニットから順に授業を進める。
- ③担当クラスが、習熟度別の「上級クラス」であるため、「予・復習」は各自の自主性に任せることにする。「予習」としては本文の単語調べ及び全訳等、予習内容の方も学生の自主性に任せる。「復習」としては、教科書掲載の問題を自主的にやってきた場合は提出させ、問題の「正誤」に拘らず「実施した」ということを「努力点」として加算する。「予習」を提出した場合も、同じ扱いとする。
- ④「授業」では、まず、教科書の本文をネイティブが音読しているCDをパラグラフごとに流す。ネイティブの音読に合わせて本文を目で追わせ、音読しているネイティブが「ポーズ」を置いている箇所に「スラッシュ」を入れさせる。
- ⑤パラグラフごとにある、教科書掲載の「T/F 問題」を短時間で行わせる。その後、1文ごとに「ポイント問題」を出し、少し考えさせてから学生に「マイク」を向けて答えさせる。その後、「意味の切れ目」を意識してもらうために、少し細かく文を区切り、教員の音読の後に「音読」させ、その後、「マイク」を向けられた学生1人にそのフレーズを再度「音読」させる。
- ④⑤はパラグラフごとに行う。
- ⑥「ポイント問題」は、予め配っておいた紙（以後、「練習の紙」とする）に全て「答え」を書かせ、間違いを赤で訂正させる。「練習の紙」には、「疑問点」、「意見」などが出ようなら、その都度、書かせる。また、授業の最後には、その日の授業の取り組みについて各々振り返らせ、その日の「反省文」として、頑張った点、失敗してしまった点などを書かせてから、授業終了時に提出させる。教員は、必要であるならコメントを入れ、次回の授業時に返却する。
- ⑦最後4回の授業では、15分間の「自主勉強」時間を設ける。「自主勉強」時間では、教科書の文章について、学生各自で「読解」を進めさせる。意味の切れ目の「スラッシュ入れ」、「解釈」、

「指示語の内容」の3点について、「練習の紙」とは別の紙に行わせる。その際、辞書、また、「予習」のノートを見ても良いこととする。「自主勉強」の内容（「質」、「量」共に）は、評価の一環とする。

3. 今回の試みに対する反省（学生へのアンケートをもとに）

3. 1. 「予習」について

今回は担当クラスが「上級クラス」であったこともあり、前回のような「予習プリント」を使用しなかった。また、前回の試みで「自主的な予習」について問うてみたところ、過半数の学生が、予習を「行った」、「時々行った」と答えていた（39%+22%=61%）こともあり、今回は「予習」自体を学生自身の自主性に任せることにしてみた。

<自主的な予習>	<前回> (%)	<今回> (%)
行った	39	16
時々行った	22	16
行わなかった	39	44
次第に行わなくなった	—	24

（表中の—は、選択肢なしの意味）

その結果、「（最初から）行わなかった」、「次第に行わなくなった」と答える学生が過半数を超えてしまった（44%+24%=68%）。今回の学生は「上級クラス」に所属していたために、テキストがそれ程難しいものではなかったということも考えられる。

「予習には何をやるべきか」を問うてみたところ、前回とはかなり違った結果となった。前回「予習プリント」を用意してやっており、「疑問点の書き出し」を予習の段階で行わせていた。大変興味深いのは、予習の段階で「全訳」をすべきと答えている学生の割合が大きく異なっている点である。あるレベルに達していないと「全訳」が必要であるが、ある程度のレベル以上あれば、「単語調べ」や「簡単に内容を見る」くらいで十分と考える傾向にあるのだろうか。

<予習にすべきもの> (前回) (%)		(今回) (%) (複数選択可)	
全訳	57	単語調べ	42
予習プリント	36	簡単に内容を見る	38
疑問点の書き出し	36	構造	7
		音読	4
		スラッシュ入れ (3.2.1.参照)	4
		不必要	4
		分からない	7

今回、授業としては、「ポイント問題」をどんどん行わせるような授業形態を取ってみた。ク

ラスは全員、英語が得意といった状況でこそなかったが、中には得意な学生もあり、比較的、問題の正解も出やすい状況にはあった。そのため、授業の進度の方もそれなりのスピードとなった。

そういった中で、「次回は予習を是非しておこうと思う」と、その日の「反省文」（2. ⑥参照）の中で書く学生が時々見られた。実際にその学生が次回の予習をしてきたかどうかまでは追跡しなかったが、学生に「予習」を「自らしてこよう」という気にさせられたのは、喜ばしいことである。また、「予習をしてきたので授業が理解しやすかった」という学生も見られた。逆に「予習をしないで授業内の問題に取り組んだ方が、（英語の）力が付きそう」と言う学生も見られたが、「強制」ではなく、「必要」と感じた場合に自主的に行う、こういった形こそが、本来の「予習」のあり方であるように感じた。

3. 2. 単元ごとの「授業」について

今回の試みでは、「上級クラス」の担当であったこともあり、前回までのような一方的に教員が「解説」をするという立場を改め、「一緒に読解を進めていく」といった立場で授業を進めて行った。流れとしては、先述のように、「CDによるスラッシュ入れ」、「内容把握問題」、「ポイント問題」、「意味の切れ目ごとの音読」の4メニュー（2. 参照）を、パラグラフごとに行わせていった。

3. 2. 1. 「CDによるスラッシュ入れ」について

今回、初めて試みてみたのが、この「CDによるスラッシュ入れ」である。これは、ネイティブが教科書を音読する速い英語をCDで聞いて、「ポーズ」が置かれていると思われる箇所に「スラッシュ」を入れさせるというものである。同じ活動が続くと学生の眠気を誘う原因にもなるので、パラグラフごとに行わせた。

最初、単にCDを聞かせるだけでは、何もしないでボーっとしてしまう学生が出てくる可能性もあるので、何か「作業」を伴わせた方が良いのではないかと考えた。また、「読解」の授業であったため、最終的に「意味の切れ目」を各自で判断できるようにさせたいということもあった。「音読」の際、「ポーズ」が置かれるのは、「意味の切れ目」の位置と重なることが殆どであることから、まず、CDでの「ポーズ」の位置を確認させることを思いついた。また、ネイティブの速い英語を毎回聞くことによって英文を少しでも速く目で追えるようになることも、必要なことだと感じた。以上が、この「CDによるスラッシュ入れ」を行うに至った経緯である。

その結果、80%もの学生が、「必要」、「ほぼ必要」と答えていた（31%+49%=80%）。

<CDによる「スラッシュ入れ」>（%）

必要	31
ほぼ必要	49
不必要	11
分からない	9

学生には、一応、練習の「目的」は話したはずなのだが、教員の話聞いていないのが学生の常である。また、上記のように、最初からはしっかりと「目的」が定まっていなかったことも関係しているのかもしれない。「行う目的が分からない」というコメントが見られた。

また、「ポーズ」が置かれていると感じる位置は、英語の聞き取り能力の差や知覚の仕方によって異なる場合もあるため、「(教員との) 答え合わせ」を敢えて行わなかったのだが、「正解を教えてもらえないので、やっても時間の無駄」「人によって(スラッシュの位置が) 違うので、やっても意味がない」とコメントしている学生も見られた。一方、初めて行う「練習」だったためか、「面白かった」と言う学生も見られた。

「意味のまとまりや強調が分かることがある」とコメントしている学生がいたが、全くその通りである。この「練習」を行うにつれ、自然とそのことに気づけたとしたら、言うことはない。ただ、目的も分からず無意味なことをやらされていると思いながら練習を続けていても、確かに効果は期待できない。もっとしっかり目的を伝えるべきであったと言えよう。

3. 2. 2. 「ポイント問題」について

上記のように、学生の「眠気覚まし」の意味もあって、今回の試みでは、パラグラフごとに「読解」を進めさせることにした。今回、使用した教科書には、偶然、パラグラフごとの「内容把握のT/F問題」が掲載されていた。そのため、「CDによるスラッシュ入れ」後は、まず、全体的な内容把握の意味でも、その「T/F問題」を行わせた。その後、前回までも続けて行ってきた「ポイント問題」で細かく内容を確認させた。

今回は「上級クラス」担当だったとは言え、やはり英語は苦手という学生も多くいるようで、特に「読解」の基本の1つである「指示語」が苦手なようであった。そんな学生には、簡単な問題を沢山こなすことにより自信を持たせようと、人を指し示すような比較的簡単なものまで出てくる度に質問した。その他のものとしては、文構造が捕えにくい部分や、抽象的で解釈しにくい所などを問題としてみた。

「ポイント問題」を出したら、しばらく考える時間を与え、答えは全て「練習の紙」(「2. ⑥参照」)の方に書かせた。クラス全体で「答え」を確認し合った後、赤で訂正するように指示した。これも、学生を眠らせないための方策である。

また、今回、初めて試みてみたのは、前回までのように、教壇から名前を呼んで学生を当てるのではなく、「マイク」を学生に直接向けて答えさせるという形を取ってみた点である。教員が教壇に腰を据えてしまえば、死角の学生に睡魔が襲うこともある。一方、教員が「マイク」を持って教室を巡回していれば、眠くなる学生も少なくなるのではないかと考えた訳である。

今回と前回では対象とした学生が違う上に、今回は「上級」と「下級」との違いもある。そのため、横に並べて比較しても余り意味がないのかもしれないが、今回は「分からない」と答える学生が多少なりとも少なかったようである。「役立った」、「大体役立った」と答えている学生の総数も、今回の方が僅かに多い(前回: $62\% + 23\% = 85\%$ ・今回: $51\% + 38\% = 89\%$)。やはり、英語能力の違いのためか、今回は「ポイント問題」も行い易かったということなのであろうか。ただ、気になるのは、「役立った」と言い切っている学生が前回より10%以上も少ない点である。

<ポイント問題>	<前回> (%)	<今回> (%)
役立った	6 2	5 1
大体役立った	2 3	3 8
役立たなかった	5	5
分からない	1 0	7

学生のコメントを見てみると、「分かるような問題は省くべき」、「(問題数より)読む量を増やすべき」、「問題の質に問題あり」といったようなものが見られた。確かに授業時間は限られている訳で、その限られた時間で有意義な「練習」を行うためには、もっと「ポイント問題」の「質」を考慮すべきであろう。簡単な「問題」で自信をつけさせてやるのが大切なのは、もっと英語が苦手な学生に限ったことなのかもしれない。

その他には、「問題の意味が分からない」という学生が何人か見られた。今回の試みも、基本的に「質」より「量」といったことを意識していた所があった。どんどん問題を考えさせていれば、学生は眠くならないのではないか。問題にも少しずつ速く答えられるようになるのではないか。そのため、しっかりと「問題文」の吟味もしないまま、質問しているようなこともあった。また、「解釈」を早とちりしてしまうことも時々あった。そこへ「問題に間違いがあり過ぎ」とのコメントである。確かに、教員も人間なのだから、過ちはあるだろう。ただ、それが度重なり過ぎると学生に不信感を持たせ、授業が成り立たなくなってしまう可能性もある。要注意である。

また、「問題」を出すと言っても「テスト」ではない訳で、それなら、少しでも分かり易い方が良くだろうと、ヒントを交えながら「問題」を出すこともあった。ところが、「問題を考えている間は（考えられないので）黙っていて欲しい」という学生が何人か見られた。また、別の意見としては、「問題を考える時間がもっと欲しい」というものもあった。こちらがずっと話しているので落ち着いて考えられないということだったのかもしれない。

以上のことから、「問題内容」、「問題文」、それから、その「問題の答え」もしっかり吟味してから問題を出し、しかも、なまじヒントを出してやるよりも、「解答時間」をもう少し長く取ってやる必要があると言えそうである。

3. 2. 3. 「意味の切れ目」ごとの「音読」について

「読解」する上で「意味の切れ目」を意識するのは大切なことである。ネイティブの音読が聞ける「CDによるスラッシュ入れ」では、大まかな「意味の切れ目」しか分からないため、「内容把握のT/F問題」と「ポイント問題」を行わせた後、教員の後について少し細かく切った「意味の切れ目」ごとの「音読」を行った。これも、同じ活動が続くことによる「学生の眠気覚まし」のため、1文ごとに行った（1文の「音読」後、再度「ポイント問題」となる）。

まず、1フレーズをクラス全体で「音読」した後、「マイク」を1人の学生に向け、その学生は代表で同じ所をもう一度「音読」する。できるだけ多くの学生に「マイク」を向けることにより、少しでも学生の緊張を持続させようという目論見である。時間が許せば、前回のように、1文丸ごとを1人の学生に「音読」させることもしたかったのだが、時間の関係で（前は週2コマあったが、今回は週1コマのみであった）、残念ながら、今回はそこまではできなかった。そ

のため、「発音が分かって良い」、「眠気覚ましになって良い」という学生も見られた一方で、「短く切り過ぎて中学生のよう」といったコメントも見られた。やはり、せめてもう少し長めに発音させられるくらいの時間は取ってやるべきだったかもしれない。

「音読」に関しても、前回とはやり方が異なっているため、横に並べては比較できない所があるが、とりあえず、両者を比べてみると、以下のような結果となった。

<音読>	<前回> (%)	<今回> (%)
必要	83	64
ほぼ必要	—	29
不必要	3	0
分からない	14	6

(表中の—は、選択肢なしの意味)

そこで、「必要」、「ほぼ必要」と答える学生数の総数で比べてみると、今回の方が10%も高い(前回: 83%・今回: 64%+29%=93%) 値となった。また今回は「不必要」と答える学生は全く見られず、「分からない」と答えている学生も、前回と比べると半分以下となっている。これは、やはり習熟度の違いなのであろうか。

「下級クラス」には、やはり余り上手く「音読」できない学生もいるわけで、そういった学生には、「音読」というのは確かに苦痛を伴う行為である。頑張っでできるようになろうという意欲がなかった場合、「不必要」と言いたくなる可能性は大きくなる。また、「上級クラス」の学生は、「音読」の大切さを「下級クラス」の学生よりは理解しているからこそ、今回のように、切り方が少々短過ぎるような「音読」の仕方であっても、このような結果が得られたとも言えるのかもしれない。

「大学生になってまで1人で音読!」と驚いていた学生も中にはいたが、中には「(音読は) 楽しかった」とコメントしている学生もいた。やはり頭ばかりを使うより、時々声を出して体も使った方が良くもしい。ただ、今回は「ポイント問題」と交互に「音読」させたため、「書いていると(音読が) できなくなる」といったコメントも見られた。もう少し「音読」させるタイミングを考えてやる必要はあったかもしれない。

また、「CDによるスラッシュ入れ」の所でのコメントに、「CDを使ってシャドウイングがしたかった」というものがあつた。今回使用した教科書付属のCDは、結構速めの速度で音読されており、それに合わせて「音読」するのは難しそうである。CDの音読速度がもう少し遅い教科書であれば、そういったことも可能であろう。実際、他のクラス(「聞き取り」、「発音」に焦点を当てたクラス)では、似たような練習を実行したことがある。ノンストップのCDと一緒に教科書を音読させるというものである。「読解」のクラスの方でも、是非、試してみたい。

3. 2. 4. 「疑問点」・「意見」の書き出しについて

前回の試みでは、「疑問点」については、「予習」の段階で書き出してこさせた。今回は敢えて「予習」を強制しなかったため、「予習」の中で「疑問点」を書き出させてくることはできなかった

た。ただ、授業内に「疑問点」が出てきた場合、あるいは何か「意見」がある場合などには、授業で用いる「練習の紙」（2. ⑥参照）の方に書かせることにした。今回のこれらの書き出しについて「必要」か否かを問うたところ、90%以上の学生（69%+22%=91%）が「必要」または「ほぼ必要」と答えていた。

<「疑問点」・「意見」の書き出し>（%）

必要	69
ほぼ必要	22
不必要	0
分からない	9

コメントとしては、「わざわざ出向いて質問しに行かなくてもよい」、「（教員との）コミュニケーションが取れる」、といったものの他に、「言いたいことが伝えやすい」というものがあった。これは、やはりメール時代だからこそのコメントであろうか。確かに学生と個々に話をする機会もほとんどないので、「練習の紙」を使って学生と小さなコミュニケーションが取れるのは良いことと言えるのかもしれない。

今回、「練習の紙」の方には、「疑問点」、「意見」の他に、毎回その日の活動に対する「反省文」をも書かせることにしていた。英語が比較的苦手であると思われる学生などは、英語学習に対する不安などを書いてきたこともあった。そんな時には「練習の紙」上で激励することもできた。「疑問点」や「意見」がない場合でも、学生の状態などを知ることができ、「反省文」を書かせることは、それなりに意味があるように思われた。

一方、弊害とも言えるようなことも起こった。面と向かっては恐らく言っていないであろう、ここまで言うのは相手が教員でなかったとしても少々失礼ではないかと思えるようなことまで述べてくる学生が見られたのである。こちらが英文の「解釈」を間違えてしまったような時などに、そのことに対してコメントされるのは認めるが、その日の自分の「反省」を書くよう言われているのにも拘らず、「授業」に対しての、かなり極端な批判をしてくる学生というのは、どうだろう。もちろん、そのような「意見」を突き付けられないような授業を目指すべきではあるだろう。が、彼らは仮にも将来は医療人となる学生である。「英語学習」とは全く関係はないのであるが、他人に対しての意見の述べ方も、もっとわきまをさせる必要があるように感じられた。

また、「書いてもコメントがもらえなかった」という意見が見られた。こちらとしては、少数派の「疑問点」、「意見」には、必ずコメントを付けて返却したつもりである。また、多数同じ「疑問点」などが見られるような場合には、授業で取り上げ、解説なりコメントしたはずである。それにも拘らず、このようなコメントが見られたのは、やはり、こちらが、「練習の紙」上に書かれてある「疑問点」等を見逃してしまうことが多かったためなのかもしれない。「疑問点」などを書かせる紙面上の位置を指定するなどして、見逃してしまうようなことだけは何とか避けたいものである。

3. 2. 5. 授業内の「自主勉強」について

今回は前期の授業ということもあり、最後に「上級」、「下級」クラス合同の共通テストを行うということではなかった。「成績」の方は、授業内の「活動」に真面目に取り組んでいたか否かに負う部分が大きいのだが、学生の気を引き締める意味でも、「力試し」的要素を入れる必要があるように思われた。そこで、最後4回分の授業内の15分くらいを使って、「自主勉強」時間なるものを取ってみた。

「自主勉強」時間には、その日にクラス全体で読み進めてきた教科書の文章の次の所から、各自で「読解」を進める。その時間帯は、自分の持ち物だけを見ることができる。自分の持ち物であるなら辞書はもちろん、「予習」してきたノート等を見てもよい。他の教科の課題などで忙しく、「予習」などをしてくる学生も殆どいなかったが、もし「予習」をしてきた場合には、その「努力」点を評価に入れてやるためである。但し、人との相談、人の物を見るのは禁物であった。

内容としては、意味の切れ目ごとの「スラッシュ入れ」、文ごとの「解釈」、「指示語の内容」が主であった。その3点について、パラグラフ、あるいは1文ごとに、必ず行うよう指示をした。「練習の紙」とは別の用紙に行わせ、「自主勉強」時間終了と同時にすぐ回収した。「練習の紙」のように返却はしなかった。

「意味の切れ目」は、大まかに取ろうとすれば、「1文」ごとのスラッシュにもなりかねない。一方、細かく取り過ぎると今度は「単語」単位になってしまう。そのため、「単語」単位よりは大きく、但しできるだけ細かく、ということで行わせた。

文ごとの「解釈」では、もし可能なら、あたかも同時通訳であるかのように「意味の切れ目」ごとに前から意味を取るよう伝えた。実際、授業内の「音読」の際にも、「意味の切れ目」ごとに日本語で内容も伝えながら行っていった。前から意味を取ることは、英文を素早く理解できるようになることにも繋がるだろうし、英語を聞いて理解する上でも役立ちそうである。ただ、上手く出来ない場合は、通常の「解釈」の仕方でも可とした。

「指示語」については、次の通りである。その日の「自主勉強」時間に行うべき教科書の文章を資料提示装置で映し出し、丸が付けられた「指示語」に関して、指示内容を日本語で書かせた。ただ、「指示語」は苦手という学生も多数いたため、簡単なものでも全て丸をつけることが殆どであった。

「自主勉強」の間は、教員はクラス内を巡視し、あたかも「テスト」を受けているかのような。「テスト」と言えば、一般的に学生は身を引くものであるが、「テスト」があるから勉強するという場合もあり、学生の「学習意欲」を高める効果があるのだろうか。通常の「授業活動」時よりも、むしろ、この「自主勉強」時の方が、どの学生も真面目に取り組んでいるようにさえ感じられた。「練習の紙」に毎回書かせる、その日の「反省文」などにも、「授業は眠くなったが、自勉（「自主勉強」の略語）は頑張れた」とか、「次回も自勉、頑張りたい」などといった内容のものが多く見られた。学生たちは明らかにこの「自勉」時間には闘志が沸いてくるようであった。

ここで、授業で行った活動について「ためになった」ものを問うてみたところ、以下のような結果となった。

<ためになったと思う活動>（複数解答可）（％）

CDによるスラッシュ入れ	27
ポイント問題	53
「意味の切れ目」ごとの音読	31
自主勉強	44
その他	18
なし	4
分からない	2

この「自主勉強」に対しては、半数近くの学生（44％）が「ためになった」と答えていた。ただ、ここで少々驚いたのは、学生からは色々問題を指摘された「ポイント問題」が、「自主勉強」を抜いて過半数の支持を得ている点である。まだまだ問題点が多く、学生の不満も多いのが現状だが、しっかりと吟味して行いさえすれば、それなりに意味のある活動になっていることが分かり、安心した。

それにしても、この「自主勉強」がここまで学生達に受けるとは、驚きである。今までの試みで、「予習」を強要すれば渋々行ってきた学生達も、「授業時間」内であるなら、各自で勉強することはOKということであろうか。

前回の試みでは、「予習」として、「予習プリント」を自宅で行わせるという形を取った。ただ、専門科目の課題等で忙しい学生達に対して、さらに「自宅課題」を増やすことは、単に負担を増やすだけに過ぎない部分があった。そこで、「授業時間」内にもっと「課題」に取り組ませられたらと考え、今回は、主に「ポイント問題」をどんどん行わせ、しかも、学生の緊張感維持のため、直接「マイク」を学生に向け、どんどん答えさせるような形を取ってみた。「ポイント問題」を考えるということは、確かに学生が個々に行える活動である。が、その後、教員のペースで、どんどん「マイク」を向けられ答えさせられては、「自分のペースで」といった部分が覆されてしまうということなのだろうか。

今回、「自分のペースで自由にやりたい」と「練習の紙」に書いてきた学生がいた。確かに個々人の英語能力は様々であるという意味では、個人のペースで行えるのに越したことはない。それは単なる「個人学習」で、「授業」とは言えない可能性もあるのだが。ただ、その形の方が学生の「学習意欲」を掻き立てると言うのなら、最後の4回と言わず、初回から「自主勉強」時間のようなものを取るというのは、どうだろう。その方が、教員のペースで一方向的にいやいや「ポイント問題」をさせられるより、ずっと効果的と言えないだろうか。次回以降、是非、試したい所である。

4. 終わりに

今回の取り組みは、「前期」の授業が対象であったこともあり、前回のような「テスト」による「評価」が大きな部分を占めるという形ではなくなった。また、「予習」は強要せず（3.1 参照）、「授業時間」内の「活動」自体に焦点を当ててみた（3.2.1～4参照）。さらに、最後4回の授業では、「自主勉強」時間なるものを設け、その「自主勉強」の中身をも評価に入れることに

した (3.2.5 参照)。

今回の試みでは、今まで行ってきた「ポイント問題」の方法を少し変えてみた。前回までは、「問題」の「答え」を「練習の紙」(2. ⑥参照)に書かせ、名前を呼んで学生に答えさせるといった形を取っていた。今回は、教員が「マイク」を持って走り、「マイク」を向けられた学生に答えさせるといった形を取ってみた (3.2.2. 参照)。ところが、この学生に有無を言わさぬような今回のようなやり方は、少々不評の感があった。その一方で、自分のペースで行える「自主勉強」時間には、意外にも学生を燃えさせる威力があったのである (3.2.5. 参照)。

前回の試みでも実感したことなのだが、同じ勉強をするにしても、どのような気持ちで取り組むのかということは、とても大切なことではないだろうか。気の持ち方ひとつでその効果の方も変わってくるだろうし、第一、授業時間は限られているのである。子供が減り大学の生き残り競争が激しい現在、「学生様は神様です」ではないのだが、勉強をする主体である学生の気持ちをもっと汲んでやることも大切なことのように感じられた。

その一手段となったのは、今回も健在の「練習の紙」である。今回の試みでは、「練習の紙」には「ポイント問題」の答えの他に「疑問点」や「意見」、そして、その日の活動に対する「反省文」などを書かせていた (3.2.4. 参照)。時には、面と向かって話さなくてもよいことが災いして、勝手なことを書き殴る学生が出てしまったのは玉に瑕なのだが、この「練習の紙」を通しての学生とのやり取りは、殆ど話をする機会もないような学生の様子、状態などを知ることのできる良い手段となった。

教員の都合の良いように一方的な授業を行うことは簡単である。ただ、例え50対1ではあっても、「授業」というものも双方のコミュニケーションを通してこそ成り立つものではないだろうか。これからも学生の声に耳を傾けつつ、そして、勉強をする主体である学生の立場からも考慮しながら、学生自身が少しでも納得して勉強に取り組めるような授業形態をさらに追求して行きたい。